

協生理論学習キット

Synecoculture principles learning kit

2019・10・29 Ver.0.2j

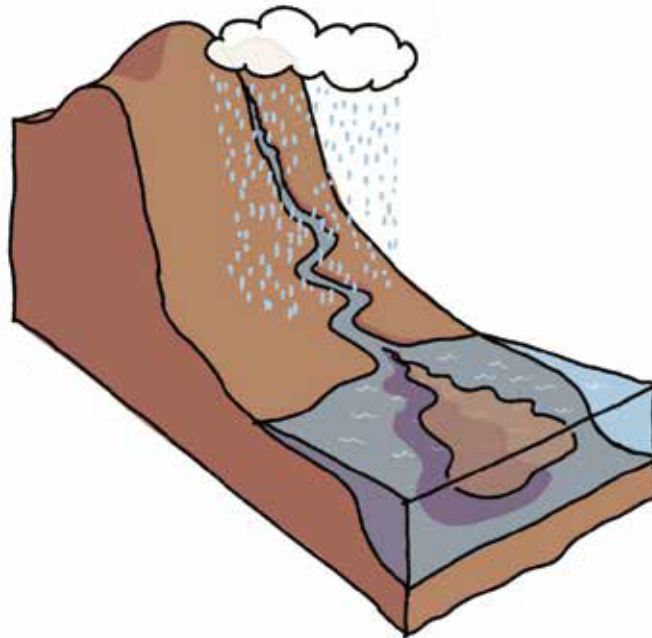
株式会社ソニーコンピュータサイエンス研究所
一般社団法人シネコカルチャー

作図：福田桂
監修：舩橋真俊

植生のちから



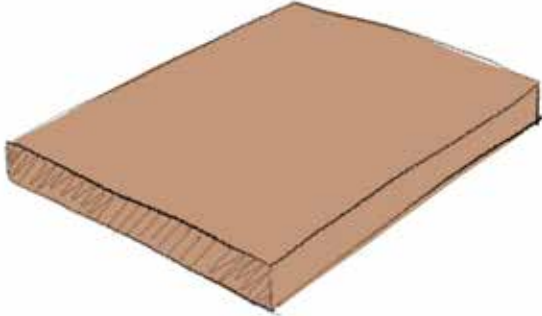
十分な植生がある土地に降る雨は表土で濾過されて地下水となり適度な栄養素を含んだ水となって海へ注ぎ、海の生き物を育みます。



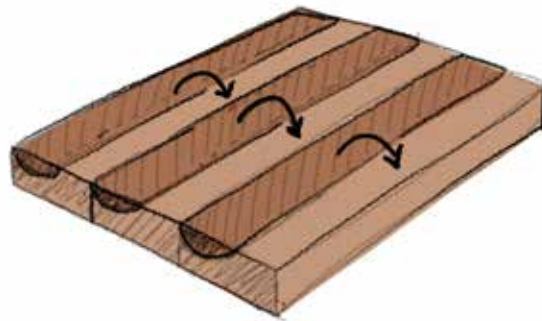
しかし植生が破壊された土地に降る雨は表土をはぎ、濁った泥水となって海へ注ぎ、海の生き物をも減らしてしまいます。

協生理論はこのような土地に植生と表土のしくみを取り戻し、人と自然が共に栄えることを目的としています。

植生と表土が破壊された地面に 新しく協生農園を立ち上げるときの基本



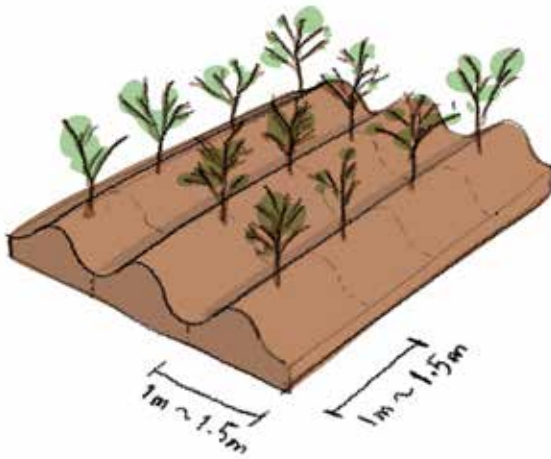
植生が破壊され、表土が露出している地面があるとします。



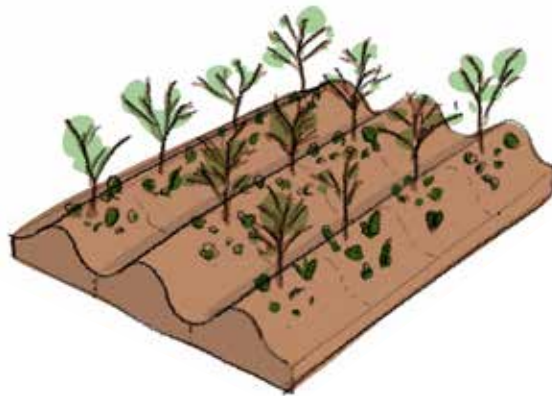
この地面を1.5メートル間隔で掘り、畝を作ります。
耕す必要はありません。



このような形になります。
植物にとっては畝はなくても良いのですが、
人間の通路としてあったほうが便利です。



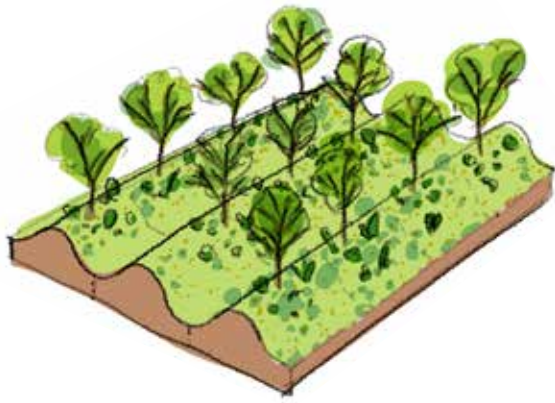
樹高 1~2m の果樹を畝に1.5mおきに植えます。
この果樹は地面に生える植物たちの日陰になります。
また、果樹が呼びよせる虫や鳥が植物たちの成長を助けてくれます。
秋には落葉し腐葉土を形成し、運が良ければ実がとれるかもしれません。



果樹が植わったら野菜やハーブの苗を植えます。
畝の日向、日陰、果樹の木漏れ日などを考えながら配置します。
この苗たちの間に種をまきます。



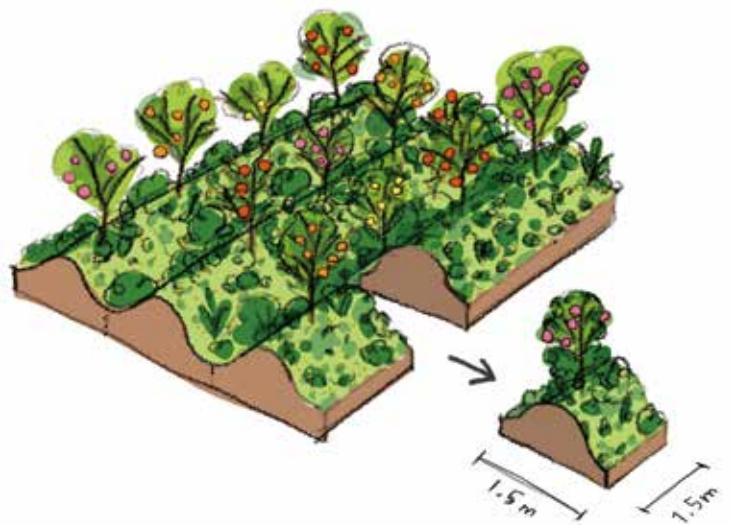
高い密度で多種類のタネをばら撒きします。
大きくなる野菜はスジまきし、豆は土に埋め、
まずは地面がびっしりと植物に覆われることを目指します。



タネが発芽し、地面が緑に覆われていきます。



然るべき場所に植物が定着したら、とりあえずは植生が回復したと言えます。
 ここから好みの野菜などを入れ替えながら畑の土壌構造を育てていきます。
 これが生き物が協力しあって表土のしくみを築く協生理論 (シネプリ) の基本です。



元々の地面に草などが生えている場合は、
 彼らの力も借りたほうがより早くこの状態にたどり着きます。
 仲間が多いほど植生が豊かになり、協生效果を実感できます。

この一部を取り出したものが学習キットの基本ユニットになります。

学習キットの例

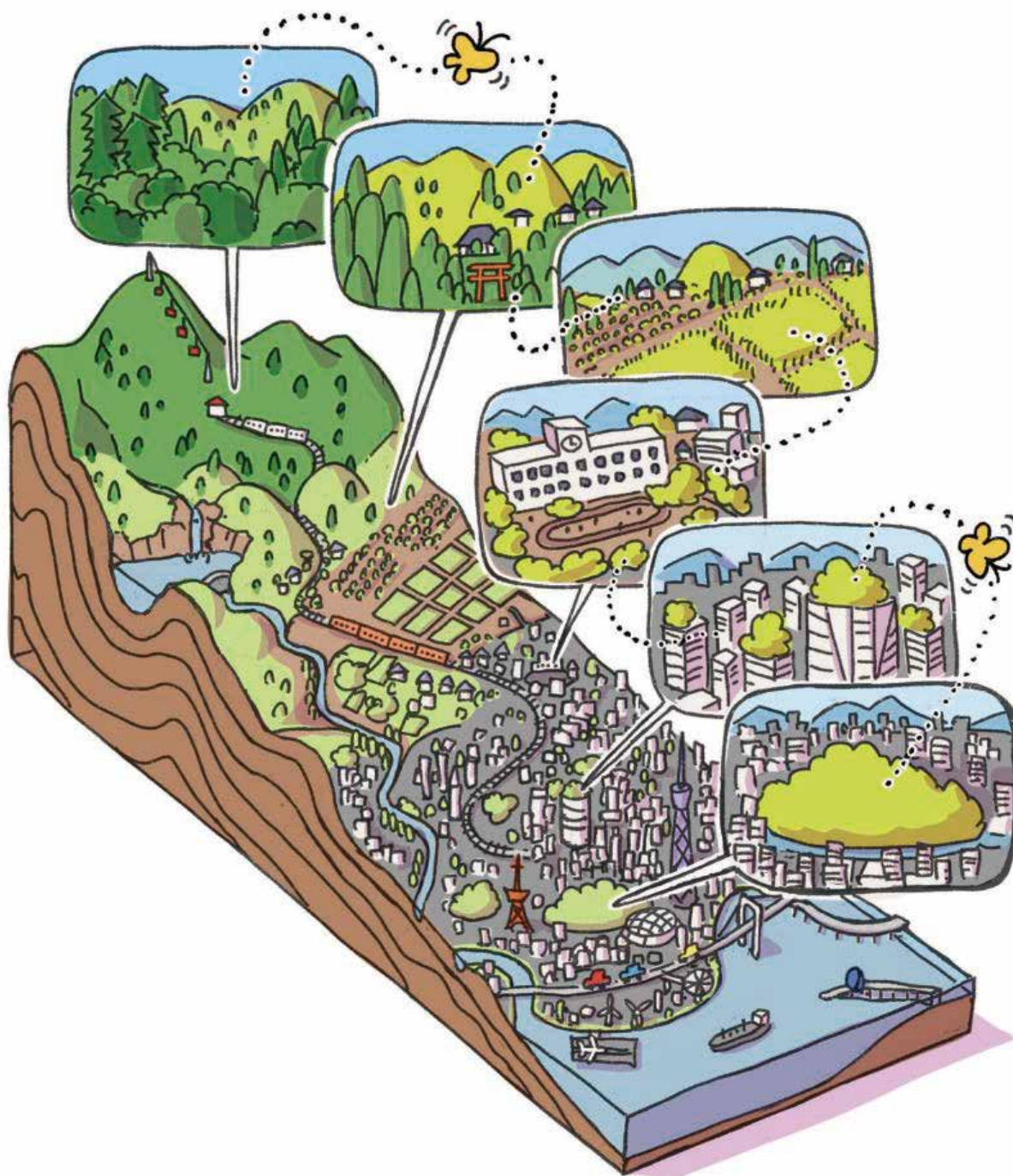
協生農園の畝を果樹一つ分取り出したものがキットの最小単位です。
このスケールでは十分な協生効果は発揮されませんが、観察は可能です。

実験をすすめるにあたって

- 1日4時間程度は日光が必要です。
- 地下水を利用できないので水をやる必要があります。
- 植生の更新の為に、常に苗床に苗を準備しておきます。
- 周囲の自然環境に大きく影響を受けます。



協生理論学習の目的



協生理論学習キットの目的は
「循環するネットワークの存在」そのものを学ぶことにあります。

循環を見える化することでその学習を可能とし、
学習キット自体もネットワークの一部となります。

都市に点在する緑地も生態系ネットワークであり、
例えばそれは高尾山の蝶が、寺社や田畑、緑地や公園、学校や緑化されたビルなどを旅して
都心の皇居までたどり着く物語として想像できます。

都市部の緑地で得られたデータは今後の都市型協生農業で生かすこともできるでしょう。

協生農法の詳細は下記の URL をご確認ください。

<https://www.sonycsl.co.jp/tokyo/407/>

